

中  
勘  
助

猫  
の  
親  
子





# 猫の親子



おとしの夏ごろだった、近所の飼い猫らしい親猫が  
子供をつれてちよいちよいこの庭へ遊びにきた。もと  
畑の中へ建てた家だそうで、そこから苗木を買ったり芽  
ばえをとってきたりしてやたらに植えたのだろう、庭と  
いうよりは藪か雑木林にちかいほうで、広くもない地積ちせき  
に柿、つげ、柳、青桐あおぎり、梅、桃、ひば、もみじ、臘梅ろうばい、棕櫚しゆろ、  
さざんか、あじさいなどが雑然と生い繁っている。その  
うえまわりを家に囲まれて犬もめつたに來ないから猫に

とつては恰好かつこうな運動場になる。親猫は大きく雉子きじぶちのはいった珍しく手のこんだ三毛みけで、顔つきが食肉獣と思えないくらい上品におとなしく、器量がいい。私は 可愛い 可愛い と大騒ぎをする家の者に あれは小野の小町だよ といって笑った。小町は皆がどうかして愛撫しようとしても子供づれのせいもあってか「誘う水あらば」と寄ってこない。彼女は子供に狙い寄られて繁みのなかを逃げ廻ったり、木の枝にかきあがって木登りを教えたり、あっぱれ賢母ぶりを発揮している。蝶鳥のごとくに跳ねあるく彼らの遊びはまことにほほえましく楽し

い見ものであつた。そのうちこちらに他意のないことがわかつたのだらう、秋のある日彼女は私たちのまえでわれもこうにとまつた赤蜻蛉あかとんぼをねらいはじめた。じつと身構えて三、四尺もとびあがり、拝むように両手を合せてつかまえようとする。しかしのろまな赤蜻蛉もそうやすやすとはつかまらず、危いところであちあがつてしまふ。と、小町は今度こそとつてみせましようか　というようにちらりと私たちに目くばせして——実は警戒心だらう。——何度でも同じ殺生をくりかえす。だが蜻蛉は運よく逃げおおせた。子供につれられてすごすご帰ってゆ

く小町には気の毒だったけれどお蔭で私たちは彼女のみやびやかな姿と軽快な跳躍ぶりを満喫することができた。

そうこうするうち乳ばなれの時期が近づいたのだろう、時おり子猫が母親のそばを離れてふらりと家へあがってくるようになった。母親のほうでも別に心配して呼ぶという様子もない。彼らはついたり離れたり嬉々として睦<sup>むつ</sup>び合いながらいつとはなしに各々自分の生活をするようになった。

母親があまり立派なためいっしょにいるあいだ子供の



ほうは一向目につかなかった。が、独りで上つてこられてみるとさすが小町の娘だけあってなかなかの代物だ。しろもの母親の複雑なぶちのとちがい大体白いところへほたりほたり黒と茶の斑ぶちのあるあつさりした三毛で、とても綺麗だ。ただ母親の上臈じょうろうらしくおとなしやかなのにひきかえて父親に似たものか底光りのする鋭い目をしている。このほうが現代的に魅力があるともいえようか。瑕きずをいえば後足が長すぎるのか妙に腰を高くして振ってあるく。しかしこれも新しい人が見たらかえって「とても素敵」なのかもしれない。ある冬の朝だった。小さな彼女は日あ

たりのいい茶の間の濡れ縁ぬにつぐんでたのだろう、誰かが障子をあげた拍子についてきて茶の間を通りぬけ隣りの居間に寝てる私のところへつかつかとやってきた。その日から「鶉うの話」に著手して年内には仕上げてしまおうと意気込んでた私は胸から上をのりだして起きるばかりになっていた。ところが彼女は子供らしい無邪気とおかまいなしで私の右腕と胸のあいだへぽっくりとはいり、小さな胴を腕のつけ根へのせてすやすやと眠りはじめた。さあそうなる私にはその肩が千斤の錘おもりとなつて起きあがることができな。余儀なく私はその

ままの姿勢で「鶉の話」の構想をすることにした。幸先がよかったのか悪かったのか話は年末ぎりぎり<sup>に</sup>出来上った。

彼女の朝の訪問は誰が教えたのでも許したのでもなくいつか規則正しい習慣になった。待ちかまえてるのか障子をあげるとたん<sup>に</sup>すつとはいってくるのを和子<sup>かずこ</sup>は抱きあげて愚痴みたいなことをいいいい濡れ雑巾<sup>ぞうきん</sup>で足をふいてやる。と、それをいやがって不平らしい声を出す。泥足がひとの迷惑になるとは知らないのだからしかたがない。さて畳へおろされると彼女は妹たちの膝にのるなり、

私の床へはいるなりして私の居間の煖炉だんろの温まるのを待つ。そのとき私が知らずに眠っていると彼女は豆つぶほどの鼻先でちよんと顔をついたり、もぎもぎと頬ずりをしたりして目をさまさせる。無断ちんにゆう入は彼らの社会の作法にも悖もとるとみえる。尤もつとも彼らの仲間にはそばへ来られても目をさまさないぼんやりはいないだろうけれど。因ちなみに人間では鼻はむしろ弱いところ、痛みやすいところだけれど、鼻をつき合せて嘘いがみあい、噛みあい、ひっ搔きあう彼らの鼻は相当硬く丈夫に出来ている。本当に鼻っぱしが強いのだ。私はなにか言葉をかけながら

夜具の襟をあげて入口をこしらえてやる。と、すぐにははいらず用心深く嗅ぎ廻してから一足ぬきにそろそろとはいり込む。毎日のことなのにほとんどその警戒的態度をかえない。全く本能的である。が、結局すっぱり夜具を被って暫く満足の喉を鳴らした後ぬくぬくと眠ってしまふ。

部屋が温まると私は起きて顔を洗い。茶の間で食事をし、新聞をよむ。そのあいだに和子は部屋の掃除をする。床をあげられた小猫は煖炉のそばに座を占め、柱によりかかってガチガチと全身をかき、じれったいほどたんね

んになめる。殊に前足をなめては頭や顔など手のとどかないところを撫でまわす様子はとんと化粧に似た感じを与える。それほど身だしなみがよくていながら汚すことは平気だ。何度でも汚して何度でもなめとるらしい。尤も汚れることなぞ気にしては彼らの屋外の生活は出来ないだろう。焚火たきびの灰のうえにいるかと思えば炭箱のなかにもいる。彼女が膝のうえに、床の中に、煖炉のそばにつぐみにくるので本名を知らぬまま私たちは彼女に「おつぐ」という名をつけた。おつぐは家じゅうのペットになった。妹たちは勤めから帰るとひとしきりおつぐ

をじやらして楽しむ。おつぐは紐にじやれ、はたきにじやれ、胡桃くるみにじやれ、しまいにはミシン用の小型の丸椅子を独りで転がして遊ぶ。それは大人ばかりでとかく理に落ちがちな——あんまりそうでもないが。——家庭に無邪気な和楽と賑にぎわいを齎もたらした。彼女が遊びあきたり腹がへつたりで外へ出たそうな様子をすると障子をあけてやる。と、どこか自分の家へ帰ってゆく。こちらの都合で帰すときには残り惜しげにしよんぼりと。

私は話にきくマタタビを猫がどれほど、どういう風愛好むものかを試してみようと思いついた。そしてそれを

薬種屋で買寄せた。マタタビは粗い粉末になっていた。薬種屋の人が和子に猫も子供のうちはたべないが大人になるのとたべる、人間がたべてもいいと云った。で、手近のひきだしへ紙袋をいれて待ち構えてるところへおつぐはいつものとおり尻を振りながらはいつてきて煖炉のそばへよった。それとばかり用意のマタタビを半分ばかり紙のうえにあけて鼻先においてみたけれど見向きもしない。まだ子供だね　そういつて私はマタタビをしま寄せた。

毎日見てるので特に目だちはしないもののおつぐはい



つとはなしに子供らしさが薄らぎ、大きく、若わかしく、脂づいて、立派な娘になった。そのうちある日私はどこかの牡猫がおつぐのあとをつけてるのを見た。そこで彼女がまたなにげなく炉辺へきたときに例のを取出してやってみた。と。今度は早速べろべろなめたあげくひっくり返って包み紙に頸くびをこすりつけた。猫にマタタビとはまさにこれ！ 子供だ子供だと思いうちに と私は和子と顔を見合せて笑った。さあそれからは雉子がくる、虎がくる、からすねこ鳥猫がくる、白がくるというあんばいで庭はきれ地の見本を並べたみたいになった。彼らは奇声を発

して嗟み合うばかりか時どき猛烈な格闘をやる。娘一人に聳むこ八人だから無理もない。やや暫くして彼らが退散したのちおつぐの乳首がうす赤くぽっちりとふくらんできた。私は和子にそれを見せてへんなどら猫の子なんぞつれてこられちゃ困るな といった。彼女はだんだん重くなる体をして、それでも毎日欠かさず炉辺へきて思ひなしか大儀そうに横になった。傍にはいつも私が机に向って読み書きをしている。その私は全く先方本位で自分の喜びのために愛撫したりからかったりすることがない。障子はしめきりだし、暖かくはあるし、これくらい

安全で愉快的な休息所はないだろう。その後姿を見せない日が続いた。その次にきた時には彼女はすっかりと身軽になっていた。そしておりおりくるにはくるが残り物でも貰うとじきに帰ってゆく。子を育ててるのだ。どんな子だろう　と思う。すると日がたってからおつぐが庭で小さな雉猫きじねこを遊ばせてるのを見た、ちやうど自分が母親にされたように。そのうちどうかすると彼女は子供づれであがってきて私の膝一杯に寝そべり、かた手で抱えるようにして乳をのませながら子供の全身を歯で掻いたりなめたりしてやり、自分もすっかり身だしなみを

したあげく海鼠なまこみたいにくつつきあってぐっすり寝込んでしまおうようになった。私は和子を顧みて　しようがないなこりや、これもなにかの御縁だよ　と彼らの眠りを妨げないように出来るだけ静に机に向って書きにくい筆を進めるのであった。

昭和三十二年





日本文学電子図書館

---

猫の親子

著 者：中 勘助

制作者：宮澤一郎

底 本：「中勘助随筆集」

岩波文庫、岩波書店

1985年6月17日 第1刷発行

---



日本文学電子図書館